

榊葉

会報「榊葉」第13号
 昭和62年3月28日発行
 発行者 森本 巖
 編集 広報委員会
 発行所 津市鳥居町
 三重県神社庁内
 三重県神道青年会



菅原神社所蔵

仲間

副会長
 山下久夫

神青という組織の中で、お互いの立場や環境を理解し助け合いながら共に悩み、考え、行動する。これが仲間というものだろう。それについても時の経つのは早いもので、「神青・神青」といいながら諸先輩にುತ್ತついてウロウロし、時には討論し、また一杯やりながら勝手放題しているうちに歳月は流れて、ふと気がつくと自分が副会長をやらされている事になっていた。

沢山いた先輩達もつぎつぎに卒業していかれ、なんと自分より年長者は数えるほどになり、いつしか自分が、かつて自分達が先輩達をそう呼んだように「オジン」扱いはされる立場になっていた。そして一方では、若い会員のしつかりした意見に接し、内心びつくりさせられることもあった。

この時の流れを思い、神青活動を振り返ってみる時、そこから学んだものは多く、すべてが財産であるが、

その中でも、知りあった同職の仲間にも勝るものはないだろう。研修会・講習会といった組織活動を通じて自己研鑽に努め、一人前の神職として恥ずかしくない自分を形成することも神青活動の欠くべからざる事の一つであろう。このように青年神職として体験しておかなければならないことは数多くある。何が一番大事かということでは色々な神青活動の中から生まれてくる人間関係、お互い同志としての意識、これらは会員にとって何ものにも替え難いものである。

神青とは気楽にものを言いながらも理解し合える場ではないだろうか。そういう意味でも、我々はさらにこの輪を広げ、より多くの仲間づくりをしなければならぬだろう。それが今後の神青活動の発展につながるのではないだろうか。

(小川神社宮司)

天皇陛下御在位六十年奉祝記念行事

『和ーるど駅伝』開催について

事務局長 樋口比呂磨

神道青年全国協議会主催、天皇陛下御在位六十年奉祝記念行事である『和ーるど駅伝』が、去る昭和六十一年九月と十一月にかけ全国を縦断して開催された。

即ち、北は北海道、南は九州沖縄より各県を駅伝形式により、延長八千キロの距離を五コースにわかれ、一路東京日本橋を目指すものである。運ぶものは、全国協賛神社の祈りのこもった御朱印であり、これを皇室と国連及び英国王室に献上される事となっている。

本会も、この趣旨に賛同し、森本会長を中心に実行委員会を組織し、数回に亘り慎重かつ綿密なる計画を練り、そして当日を迎えた。

十月三日午後一時十五分、三重県神社庁前にて奈良県よりの御朱印奉搬車を、森本会長以下会員・敬神婦人連合会会員・女子神職会会員約五十名が国旗を振って出迎えた。

午後一時半より神社庁神殿に於て、宮崎吉保三重県神社庁御参列のもと、県内各神社よりの御朱印をお供えし



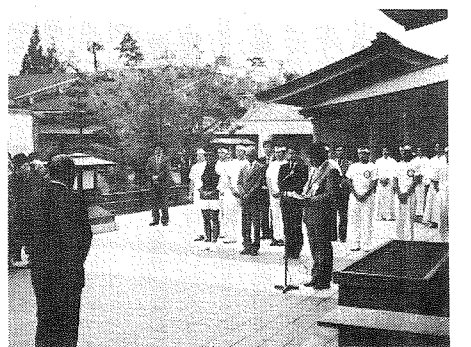
奉告祭を齎行。終了後、奈良県森本会長より三重県森本会長へ無事引き継がれた。そして、愈々県庁経由三重県護国神社迄のパレードが行なわれ、飛脚の出で立ちに文箱を持った前川副会長に続き、揃いのTシャツの会員達が「奉祝天皇陛下御在位六十年」の垂れ幕をつけた先導車・伴走車の「ワッショイ・ワッショイ」の声援のもと元氣よく護国神社まで快走した。正式参拝の後、伝達式が執り行な

われ、国歌斉唱・森本会長挨拶・御朱印引渡し(奈良→三重)・奈良県森本会長経過報告・来賓挨拶 宮崎三重県神社庁長・祝電披露(三重県知事・津市長)・聖寿万歳と式次第により執り行なわれた。

伝達式が終了すると、参列者の声援のもと疲れも見せず再び神社庁までパレードをした。到着後、奈良県会員を交えさやかな懇親会を開催し、道中の御苦労をねぎらうと共に、明日への活力を蓄えた。

神社庁で一泊、翌四日も快晴に恵まれ、奉搬車他四台に十五名が分乗し早朝七時に出発、一路神宮をめざした。道中では、会員が交代してマイクを握り、通勤・沿道の人々に向かって「陛下の御在位六十年を奉祝致しましょう」と広報活動を行なった。そして、結城神社・猿田彦神社・神宮を参拝し御朱印拝受、愈々岐阜県会員の待つ南宮大社へ向け、一路国道二十三号線・号路線の県内各地を経て北上した。

そして、午後三時、岐阜県会員他多数の盛大なる出迎えのもと無事南宮大社前へ到着し、御朱印は宇都宮岐阜県会長の手に無事引き渡された。尚十月二十三日、全国より百三十名の参加のもと、東京日本橋より皇居に向けて最終セレモニーが執り行



われ、本会より森本会長・山下・前川副会長・村田理事が参加した。(深田神社祓宜)

奉仕会員

前川栄次

神道青年全国協議会に於いては、天皇陛下御在位六十年を奉祝し、昨年九月に、北は北海道、南は沖縄より東京日本橋にむけて、宝祚長久・世界の平和・人類の福祉・母国の隆昌の祈りを込めた全国協賛神社の御朱印を、「和ーるど駅伝」のイベントにより、陛下・神社本庁・国連に納めさせて頂きました。

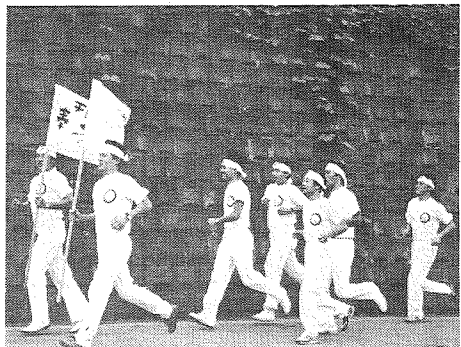
三重県におきましても、県内多数の神社より御朱印・御協賛を頂き、

十月三日・四日に神社庁・護国神社において、奉告祭・伝達式を宮崎神社庁長を始め女子神職会・敬神婦人連合会の多くの参列を賜わり、奈良県から受けて無事岐阜県に引き継ぎ出来ましたこと、衷心より厚く御礼申し上げます。

日本の国を愛し、陛下・皇室を守護し・親を敬う事は日本人として当然の事でありませぬ。しかし、今現在の教育においては、何も子供達に教えていないのではないのでしょうか。私達神職の手によって導かなければいけない問題と云います。

一人でも多くの人に、いや国民総ての人に国を愛する気持ち、陛下の長久を願ってお祝いする心を持ってもらう為に努力しなければなりません。この奉祝行事において、どれ程の成果があったのかは目に見えませんが、人々の心の中には、きっと素晴らしい種が蒔かれたことと信じています。私自信、祈りを込めた御朱印を持ち、伝達出来ましたこと、感謝すると共に感激に絶えませんでした。参列の皆さんの拍手・日の丸の鮮やかさ、耳に・目に焼き付いています。

青年神職、体力においては充分ありエネルギーもみなぎっています。この若い力をもって、進みたいと思っています。何事も「和」の心を持ち、大きな目標に向かい、一歩一歩



確実にすすむようではありませぬか。会員諸兄には、益々の御努力を賜わりますよう御願ひ申し上げます。奉祝行事については、かさねて、心より御礼を申し上げます。(江島若宮八幡神社宮司)

奉仕会員

上嶋泰司

昭和の大御代を全国民で寿ぎまっろうと、「天皇陛下御在位六十年奉祝行事並びに国際平和年記念行事」として「和ーるど駅伝」が実施された。北は北海道、南は沖縄より東京の日本橋をめざして、各神社から朱印を集めながら駆け巡る行事である。

当県も十月三日・四日に奈良県神道青年会から御朱印を受取り、岐阜県神道神興会へ手渡すまで盛大に執り行われた。先ず、三日の午後一時三十分、われわれ会員と敬神婦人会等の出迎えの中、無事奈良から到着し、神社庁に於いて奉告祭が齎行された後、前川副会長の飛脚を先頭に八人の伴走者が、伝達地「三重県護国神社」に向かいパレードした。

パレードの内容は、飛脚を先頭に「和ーるど駅伝」と大きく書かれた横断幕やオリジナルTシャツを着た神青会員にて賑々しく執り行われた。伝達式も護国神社にて滞りなく齎了し、再度神社庁へ三重県庁前経由でパレードが行なわれた。

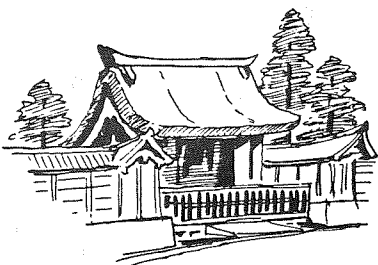
翌四日は、結成神社参拝後、車六台で伊勢へ向かってパレードし、外宮・猿田彦神社から内宮へは、車を降り、神宮道場前道路を駅伝隊によりパレードし、全国から御参拝の方々と地元の方々によりパレードの主旨をアピールし、同慶を得た事は云うまでもない。

こうして集められた御朱印は、次の伝達地である岐阜県の南宮大社へと向った。そして、無事に岐阜県神道神興会に手渡された後は、次の愛知県へと、県から県へ駅伝を重ねて、最終的には陛下の元へ献上され、国



民総てが天皇陛下御在位六十年を奉祝するものとした。

私自身も参加させて頂き、一部分ではあったが、自分の足でこれらを伝授出来た事は、素晴らしい光栄なことと感じた次第である。(頭之宮四方神社権祓宜)

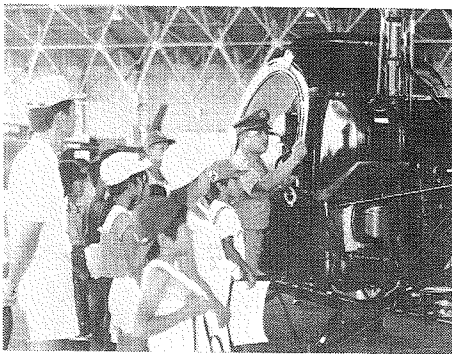


第十一回お宮の子供会報告

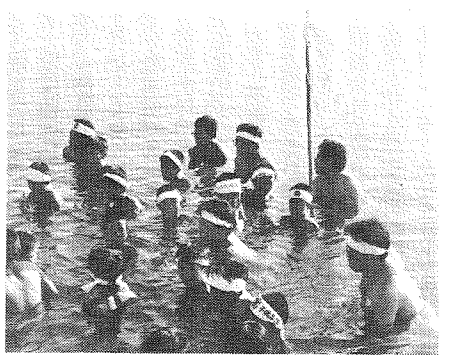
於・渡会郡官舎神社
奥 出 克 尚

第十一回お宮の子供会は、八月六日より八日まで、度会郡小俣町の離宮院跡にある、官舎神社及び離宮院公園にて開催致しました。参加した子供は県内より合わせて五十二名。中でも、官舎神社宮司様等の御協力により地元の子供達も多数参加してもらい、暑い暑さの中、皆元気に三日間を過ごしました。

今回は、今までのお宮の子供会をもう一度見直し、神道教化並びに道徳教育に目を向け、楽しさの中にも意義深いものにと、例年になく新しい企画を試みてみることにしました。先ず第一日目に、近くにある老人ホーム「高砂寮」への慰問を致しました。ホーム到着後、挨拶を兼ねて子供達が各班に分かれプレゼントを渡して廻り、そして、寮の中庭で集り対面式をしました。続いて、小泉美智子先生（伊勢市上社・祢宜）による復話術・講話を聞き、ゲーム等をして楽しく過ごしました。夕食もホーム食堂にてカラオケ等を楽しみながら一緒に食事を頂きました。初めての



試みであり、打合せ下見等の不十分な点もありましたが、ホームの皆様にも何んとか喜んで戴きました。子供達も「家にいる祖父さん・祖母さんを大切にしたい。」「老人のいる息子や孫は何をしているのか。」「等の意見がその後の話し合いで聞かれ、それなりに意義深い経験であったように、先ずは胸をなでおろしております。又、今後も今回の経験を活かし、開催地である老人との交流を企画してどうかという貴重な意見を



が会員の中で多く出されました。これからも、外部にアピールする企画に目を向けることが大切な事でありましょう。

二日目は、先ず明野の自衛隊と斎宮跡の見学を行いました。自衛隊の方は隊員の方より説明や子供向けの映画も見せて戴き、昼食は自衛隊隊員と同じ食事を体験させて戴きました。大変親切にして戴き、良い経験になったと思っております。斎宮跡の見学の方は、少し難しかったようであり、予め斎宮についてある程度説明しておくべきであったと反省しております。

この日の夕食は、各班ごとにメニューを決め、買物も料理も子供達が中心に考え、作る事となり、それぞれに手間取っていたようですが、

少しでも作る喜びを味わってもらったことと思います。

夕食後は恒例のキャンプファイヤーでありましたが、今回は神道教化を考えて、先ず神社拝殿前にて、「火取り神事」を斎行し、鑽火（きりび）にて火を起し、その火を子供代表男女一名ずつの持つ二本の松明に移して、キャンプファイヤーのメイン篝火に点火しました。又、前日に子供達が飾り付けをした樽神輿を皆で担ぎ引っぱり、鐘や太鼓も賑やかに拝殿前より移動しました。この新しい試みはまだまだ考える余地はありますが、お宮の子供会にふさわしいものであり、今後も続けていくべきだと思えます。

三日目は、宝さがし、絵馬作り等を行い、昼食後拝殿前にて子供一人一人に修了証、写真を渡し解散致しました。

三日間を通してみると、色々と言省点も多かったのですが、事故もなく無事終了することができました。御協力をして戴きました皆様様に改めて厚く御礼申し上げます。

（花岡神社祢宜）

会員ニュース
御 結 婚
・昭和六十二年
三月二十七日 頭之宮四方神社権
祢宜上嶋泰司君。新婦由紀子

第一回神道研究会 にて思う事

岡 野 清 彦

現在のこの混沌たる社会において神社を取り巻く種々の環境は、ある面においては大変むづかしくなっている。我々一人一人がただ画一的でなく、より独創的な発想を持ち、独自の思想教化論を各々思い出すことが必要である。そういう意味で本神道研究会は大変有意義であったと思う。

先ず、日頃我々は自己の研鑽に励んでいいるが、何か一国一城の主的感觉を保有し、自己中心のであり（私だけがそうなのかしれない）、研修の機会も少なく、特に、神宮会員の方とはあまり親交をもてたこともなかったが、皆で寝食を少ししてはあったが共にし、一体感が持てたと

思う。
次に神宮の奉仕伝統については、特に神宮文庫資料等の独自の物が多く、当時の奉仕の精神は伝統として後世に伝承し、又、我々が学ぶべき点、現代にも対応させることができると、応用すべき点なども数多い。又、鈴木重胤という一国学者を通じて、現在の神職の神道思想的要素の喪

失を思い、第三次宗教ブームといわれている今、ただ我々は伝統を守るだけでなく、伝統を守るが故にあらゆる可能性への挑戦が必要だと考える。今回の様に伝統性、いわば保守すべき点を学び、我々自身が問題提起し、ただ講義を聞くだけの受身ではなく前向きな姿勢となり、それぞれ持っている疑問・問題・思想を出し合って、我々の力により神道に、民衆に新たな息吹を与えようではないか。

神主は昔から保守的であると一般にいわれるが、我々の先人がそうであったらうか、もつと今よりも革新的考えではなかつたらうか。今時代は、行動的の神道神道を求めているのではないか、それに対応できるのは神青しかいないのではないか。例えば、僧侶が葬式坊主といわれる様に、雑祭だけをやる神主ではないか。そこには衰退しかない。

式年遷宮へあわずか、神宮のおひき元の我県、三重の神道青年であるが故に全国から注目を集め、この中から共に磨き合い、第二の若き首長が、篤胤が、重胤が三重にはいると言われる様にならうのではないか。回を重ねるごとに益々この神道研究会が発展する事を願ひ、皆様の協力を求める次第である。
（川上山若宮八幡神社祢宜）

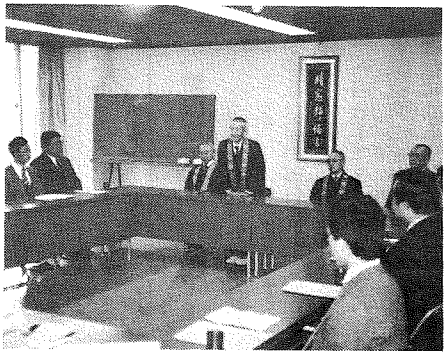
異種研修会 について

内 田 和 夫

他宗教との初めての合同研修会、『第一回三重県神道青年会異種研修会』が、去る十一月十三日、高田本山（津市一身田町、真宗高田派専修寺）に於て開催された。

当会からは、森本会長以下十四名の会員が出席。先ず始めに、午後二時より山門正面に位置する御影堂を始めとする諸建物や、自然のままに保たれている閑静な庭園等を約一時間半に亘り説明を頂きながら拝観した。その後、午後三時半より宗務院二階の会議室に於て、宗務院長の望月先生より歓迎の御挨拶を賜り、引き続き教学部の清水谷先生より、「高田本山は、真宗高田派専修寺といひ、宗祖は親鸞聖人、本尊は阿彌陀如来、成立は鎌倉時代で浄土真宗を開いた親鸞聖人が五十四才の時、下野国（現在の栃木県）高田に御堂を建てられ、真仏上人に伝えられたのが始まりで、室町時代の寛正六年に、中興真慧上人が今の地に移された等々」一時間余り由緒沿革及び教えについてのお話を拝聴した。

午後五時頃より会場を高田青年会館内の『水月亭』に移し、懇親会



を開催。御多忙の中、本山より清水谷、服部両先生の御出席を頂き、まず会長より、本研修会開催に際し、本山よりの種々の御厚遇に対し感謝並に御礼を申し上げ開宴。特別献立の精進料理をいただきながら、席上両先生より「香典の意味」、「焼香の仕方」又、神社界と同様後継者問題が悩みである等のお話を伺いながら、本日の異種研修会は有意義かつ盛会裡に終了した。（研修委員会）

大麻頒布促進運動報告

「凧」が
ふれあう心を……

大西 克美

鈴鹿降しの寒空の中、会員皆様方の熱意ある御奉仕により神宮大麻頒布を終えました事、心より深く感謝しております。

今回は、新たな教化としての「凧上げ大会」が大好評で、当社総代を始め氏子の方々から「ああいう行事を私たちは望んでいます。神主さんと氏子が笑いながら、楽しい一時を過ごさせていただきました。」と後日数多くの方々から話を聞きました。私は凧が、ふれあう心と呼び起こしたのだなあと感銘しました。物質的に恵まれているこの時代に、今一番欠けている「心」を凧が再認識させてくれました。正月にも広場・グラウンド等で、あの時の凧が空高く舞っていました。よほど子供達にとって嬉しい出来事だったのでしよう。

想えば、私達の幼少の時の遊びが今の子供達にはなく、テレビゲーム等家の中の遊びが多く、不健康な事ばかりです。戦後生れの私たちが青年神職がより力を合わせ、古き良きものを伝承する事を忘れてはいけな

い事でしょう。私の子供も参加させていただき、最初は凧が全く上がらなかったのですが、最後になってやっと空高く上がったようです。翌日の朝食の時、「お父さん、私の凧すごく上がったよ、凧が気持ちよく舞っているの、そのまま糸を離してやろうかなと思った。」と、いかにも子供らしい発想で、その声はいつになく大きな声で得意気に話していました。

こういう何気ない事がふれあいの大きな輪となり、心を豊かにするものなのですね。次回からも、このような教化を忘れる事なく継承していきましょう。

最後になりましたが、協賛していただきました鈴鹿支部の方々に、紙面を通して厚く御礼申し上げます。
(久留真神社 宮司)



遷宮に向けてIII

御木曳初式(皇大神宮)

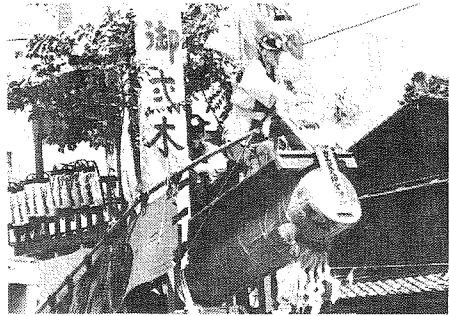
四月十二日、宇治橋下流の御側橋上流右岸より、川曳二十三奉曳団約六千五百人の手により内宮五丈殿へ奉曳された。御木曳初式は役木曳とも言われる。役木とは正殿の棟持柱などに使用する代表的な御木や別宮の大事な御木を伝統をもつ町が曳くのです。昔は内宮は八郷曳とも言われた。

午前七時、打上げ花火を合図に、皇大神宮御料の一番木が奉曳者の見守る純白の綱で木櫓に固定された。正宮御料から別宮御料十本が八時にはすべて木櫓に積まれた。

午前九時五分、打上げ花火を合図に御側橋より一番木を曳く進修・浜郷連合奉曳団が出発した。午後一時三十分、一番木、二番木、三番木が御手洗から第二鳥居へ曳き上げられた。浄衣をつけた神宮式年造宮庁の太西参事以下八名と青色の素襖に烏帽子姿の小工六名が、午後一時四十分祭典安閑を参進、お木を迎えて第二鳥居内に進んだ。午後一時五十分、幡掛少宮司以下の神職は同鳥居内で出迎え、大麻・御塩でお木を

渡辺 修

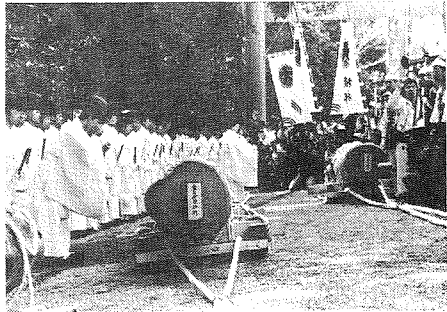
抜い清めた後、神楽殿東の五丈殿前で木櫓からおろされた。ひきつづき、大宮司以下と造宮庁参事以下が正宮に進み、中重で八度拜の儀を行い、続いて別宮を遙拝して齋館へ向いお木曳初式を終えた。



豊受大神宮

四月十三日、伊勢市宮川から外宮五丈殿へ奉曳された。この奉曳は内宮と同様役木曳で五本曳ともいわれる。

午前六時前、一番車を曳く小川町



奉曳団により御神木は木櫓に乗せられ宮川堤に曳き揚げられ、木櫓の前と後から綱を曳く、どんでん返しが行われた。この後、御神木はお木曳車に積みかえられた。午前八時三十分、一番車は二本の綱に曳かれ出発した。木遣首頭も高らかに町々を進み、午後二時前に豊受大神宮御料三本が外宮北御門口広場に到着した。北御門鳥居内では、慶光院大宮司以下の神職が出迎えて、大麻、塩により御神木を抜い清め、九丈殿の前に降された。

続いて、大宮司以下の神職・造宮庁参事以下の職員は、正宮中重に参入して八度拜の儀を行い、引続いて別宮遙拝所にて遙拝し二日間にわたる御木曳初式を終えた。

表紙写真説明

天神像

鈴鹿市国分町鎮座
菅原神社所蔵

当神社は伊勢国分寺近くの丘陵(天神山)に鎮座し、創祀は久安三年(一一四七年)と伝えられ、御祭神に菅原道真公をお祀りしている。社伝によると、菅原道真の近臣三重郡采女の豪族舎人兵衛土師兼重が道真自作の像を賜わり、その兼重七世の孫辻嘉右工門豊武が久安三年に祠を国分村に建て、この御神像をお祀りしたのが当神社の創祀とされている。

松材の一本造り(像高五十一厘)にて、冠をいただき、胸前で笏を持つため手をくむ老男神坐像である。但し、今は笏は失われている。高い大きな冠、襟の高い服制、顔に比べ衣の部分が非常に簡略化されている点は、老若の違いをそあれ藤原末期の作(秦川勝像)とよく相通する特色がある。あごひげが長く垂れ、穏やかで伏せ目がちな顔やなで肩で物静かな姿には藤原調がよくでている。腐蝕が甚だしいが、少しもその神神しさを失わない立派な作である。

今後の遷宮諸祭典

| | | |
|-------|------------|--------------------------------------------|
| 六二年五月 | 御木曳行事(第二次) | 第一次の御木曳行事と同じく内宮では五十鈴川を川曳し、外宮では御木曳車で陸揚げします。 |
| 六三年四月 | 鎮地祭 | |
| 六四年二月 | 宇治橋渡始式 | |
| 六七年三月 | 立柱祭 | |
| 五月 | 掃付祭 | 正殿の屋根の重をふきはじめるお祭です。 |
| 七月 | 豊祭 | |
| 六八年八月 | お白石持行事 | 新宮に敷きつめる「お白石」を伊勢市民、遷宮奉賛会の方が奉獻する盛大な行事。 |
| 九月 | 御木曳 | 二神体をお鎮めする御船代を刻み祭り御正殿に奉納する儀式。 |
| 九月 | 心御柱遷座 | |
| 十月 | 後鎮祭 | 御装束・神宝・遷御の奉仕員を洗い清める。 |
| 十月 | 川原大祓 | 二神体を新宮に運ばします。 |
| 十月 | 遷御 | |
| 十月 | 大御祈 | 遷御の翌日、新宮の大御前に助使が幣帛を奉獻されま |
| 十月 | 奉幣 | れます。 |
| 十月 | 古物渡 | 遷御の翌日、神宝類を新宮に移す儀式。 |
| 十月 | 御神楽御舞 | |
| 十月 | 御神楽 | 新宮の四丈殿で宮内庁楽師により御神楽と神曲が奉奏されます。 |

